

現代都市における「ソーシャル・キャピタル」の生成実践

——寺院祭礼（手作り縁日）を事例とした考察——

高崎経済大学 石井清輝

1. 目的

本報告の目的は、現代の都市においてどのようにソーシャル・キャピタルを生み出すことが出来るのか、その実践的な手法や要因を考察することにある。これまでのソーシャル・キャピタルに関する研究の多くは実態把握に関するものであり、どのように生み出すことが出来るのか、生み出される要因はどのようなものか、という点に関しては具体的な提案も実証的な事例研究も不足している（今村・園田・金子 2010）。本報告では、現代の都市においてどのようにソーシャル・キャピタルが生み出されるのか、その方向性を寺院祭礼の事例分析の中から試論的に提示していきたい。

2. 事例の概要と研究の方法

本報告では、毎年7月9日、10日に東京都文京区にある仏教寺院が開催している手作り縁日を事例とする。本事例は、通常の縁日とは異なり、寺と有志の手により企画・運営が行われている。かつてはいわゆる「テキヤ」が出る縁日であったが、2000年以後徐々に協力者を募り、現在では毎回100人前後が参加するまでになっている。本報告では本事例を、ソーシャル・キャピタルを生み出していくための実験的な試みと捉え、参与観察、参加者へのインタビュー調査、調査票調査を方法として採用し、その生成過程を解明していく。そこから、縁日を契機として生み出されているソーシャル・キャピタルの実態を確認し、その生成要因について考察を加えていく。

3. 結果

調査からは、縁日を契機として参加者間で新たなネットワークが生まれ、信頼感や互酬性の規範（「橋渡し型」のソーシャル・キャピタル）が醸成されつつある実態が確認された。さらに、詳細な検討の結果、①自由な参加空間が確保されていること、②縁日における出会い、共同作業、販売行為等から各自が何らかの「楽しさ」を得ていることが、人々が自主的に縁日に参加する要因になっており、③縁日での共同作業、寺を媒介とした参加者間の日常的なやりとりを通して連帯意識や信頼感が生み出されていることが明らかになった。

4. 結論

本事例の検討から、主催者、参加者双方が、当寺院祭礼が置かれている社会的条件の認識を深めながら、新たな関係性を紡ぎだすための「実践的な知恵」を蓄積してきていることが明らかになった。本事例からは、①自由な参加空間、②参加者それぞれにとっての「楽しさ」、③連帯感を醸成するための仕掛け、の3点を確保したことが、「橋渡し型」のソーシャル・キャピタルの生成を可能にした要因であったと結論づけられる。現在、同様の試みは各地で数多く展開されており、その実践を詳細に読み解いていくことが今後求められているといえるだろう。

文献

今村晴彦・園田紫乃・金子郁容,2010,『コミュニティのちから—“遠慮がちな”ソーシャル・キャピタルの発見』慶応義塾大学出版会。

Putnam,Robert D.,2000,*Bowling Alone – The Collapse and Revival of American Community*,NewYork:Simon&Schuster. (=2006,柴内康文訳『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.)